

■■■ 新年のご挨拶 ■■■

新年おめでとうございます。

今号でKFCニュースも100号を迎えることができました。ついでに私も年男になりました（びよんぴよんいきたいです）。新年おめでたいことばかりなので、この調子で今年1年、よい年であってくれればと願っています。

はじめにならべた新春の文字は、調べることができたKFCに来ている方々の母語の言葉です。インターネットの時代、少しの手間で情報を簡単に手に入れることができます。一方で人に対する関心やおもいやりが薄れている時代でもあります。

地に足をつけ、小さな声に耳を傾け、下を向いている人たちを勇気づけられるようなKFCでありたいと思いますので皆さん、今年もよろしくお祈りします。（理事長 金宣吉）

理事から新年のご挨拶

セボックマーニパドウセヨ。新年明けましておめでとうございます。

すがすがしく、正月らしい朝を迎えたい思いでいっぱいなのですが・・・。

日本は、ぬるま湯の中の危機、韓国は熱い危機、根っ子は太くつながっているのは間違いないのでしょうか・・・。少しでも希望のある明日を求めて、日々流す汗が、無に帰さないことを祈りたい気持ちです。

今年一年、KFCのみなさんと共に前を向いてしっかり歩んでいきたいです。

（副理事長 李圭燮）

明けましておめでとうございます

年を取ったせいか物忘れが激しくなり、年を取るのも早く感じるこの頃です。

昨年暮れにドキュメンタリー映画「弁護士 布施辰彦」の試写（本上映は1月22日から28日元町映画館）を観て感動しました。あの暗黒時代に政治、国籍、性別、宗教を超えて、「生んべきは民衆のため、死すべくんば民衆のために」と生き抜いた闘うヒューマニストの生涯に感名させられました。布施氏のように生きることは至難のことですが、爪の垢でも味わえるような生き方をしたいと思うばかりです。（副理事長 中村 通宏）

皆様、新年あけましておめでとうございます。KFCニュースも100号を迎えたとのこと、これまでニュース記事を通してKFCやKFCを応援してくださる皆さんとのつながりを実感することができたように思います。毎回のニュースづくりに尽力されてきたスタッフの皆さんに、心より感謝申し上げます。めざせ200号！今年も2月20日の第2回KOBEカンタービレ・コンサートでお会いしましょう！（理事 野崎 志帆）

今年は試練の多い一年でしたが、たくさんの貴重なことを学んだ一年でもありました。人間にとっては、生き続けているということ、それだけでも充分すばらしいことだと思います。まして、KFCに日本語を勉強しに来ていた子どもたちが、大学に進学し、立派な社会人になっていく姿を見ることができるようになるのは嬉しいかぎりです。今後ともこの街で、KFCと共に歩んでいきたいです。（理事 樋口 大祐）

景気の低迷が続いているだけでなく、政治の混迷も一層顕著になり、この事態を打開する見通しも見えてこない状況で新年を迎えることになりませんが、外国人労働者の切り捨てや外国人の人権が脅かされる事態がより一層懸念されます。定住外国人の権利擁護のためにも、KFCの活動がますます重要になってきます。今年もよろしくお願ひします。（理事 吉井 正明）

■■■ 100号記念寄稿 ■■■

KFCニュース100号記念、おめでとうございます。私は初号に特別な思い出があります。

KFCニュース初号の発行は1997年3月でベトナム語版と日本語版を同時に発行することに決めました。私はスタッフになってから2ヶ月しか経ってない時でした。私はKFCに入るまでゴム屋で貼工さんの仕事をしてたので、事務職もパソコンも縁が全くなかったのに、私はベトナム語版の担当でした。ベトナム語は記号もあるので入力するだけでも大変苦労しました。慣れない仕事をしたせいか高熱を出てしまい朦朧とした中、発行日に間に合うように必死に作業しました。たったB4表裏だけだったのに、多くの時間がかかったことを今でも覚えています。

しかし、数日後一つの手紙が届きました。なんと真っ赤に直された初号のベトナム版でした。ベトナム語がミスだらけだったからです。最初「これは酷い」と体全身が震えましたが、時間が経つにつれ「私ってなんて軽率な行為をしたんだろう。なぜ印刷物を軽く見たのか？これは読者をなめる行為に違いない」とだんだん後悔の気持ちに変わりました。おかげでそれ以後、私は印刷物を慎重に扱うよう心がけをしています。

今でも誰がその手紙をくれたのか分からないままですが、私にとって「思いがけない恩人」です。この人がいなければたぶん今でも印刷物を甘く見ているでしょう。大変ありがたい出来事でした。

KFCで勤めたことは私の人生を大きく変えたし、KFCで経験したこと、学んだことを今NGOベトナムin KOBEを通して社会に還元したいと思います。

（NGOベトナムin KOBE 代表 ハティ タン ガ）

ニュース100号記念寄稿～支援者のみなさまから原稿をお寄せいただきました。

「励まし、励まされ」

日本語能力試験1級をめざすティさん（ベトナム）は、通勤電車の中やお昼休みに言葉や漢字を覚えるようにしているという。彼女の学習に寄り添う中で、ややほったらかしの私の英語も、このくらい努力が必要なのかもと思うようになった。

年が明け、新年の抱負が「日本語1級・英検2級合格を目指してがんばろう」となった。互いに宣言したものの、1月はあっという間に過ぎた。週1回出会うティさんが「勉強してますか」と言う。ドキリ。これはいけないと2月に学習計画を立てた。4、5月になると「いよいよですね。」と励ましやらプレッシャーやら分からない言葉をかけてくれる。彼女には及ばないが、時間を見つけて久しぶりに真剣に勉強した。

8月認定証をもらったときは本当にうれしかった。彼女との出会いが、私をトライする場へと引っぱってくれた。ティさんの方も、次年の検定でみごと合格となった。（宇野 祐子）

私は日本語ボランティア養成講座などで自分の経験を話すようになって、日本語を教えることに興味を持ち始めた頃から既に10数年経っていることに気付いた。

私がKFCの日本語プロジェクトに参加したのは1997年であったようだ。それ迄日本語教師を夢みていたので日本語ボランティアなどこの世にあることすら知らなかった。いったいなにがこの

道へ私を導き、このように長く身をおくことになったのだろう。

多くの学習者との出会い、そしてボランティアの支援者の仲間。支援のやり方を共有し、悩みを打ち明け、お互いに日々研鑽を重ねてきたあかしがこのKFC-Newsである。

スタッフに支えられ、支援者に支えられてきた今、周りの人たちすべてに「ありがとう」と感謝の言葉を言いたい。

日本語教室がこのように継続してこられたのは目には見えない多くの人のささえがあってこそ。

また兵庫日本語ボランティアネットワークでのKFCの存在は大きく、KFCの一員として鼻が高い。

この先ボランティアとして悔いのない活動を続け、そしてKFCの日本語教室のさらなる発展を心から望んでいる。（高橋 博子）

私とKFCとの関係は、深江のボランティア教室の人からこちらでグループレッスンの講師の募集を知らされた事から始まりました。それから、こちらで働かさせていただく事になり、今年で3年目になります。この間、主にベトナム人を中心にいろいろな外国人と接する事ができ支援しました。最初は大変だった授業も今ではあまり準備時間をかけずにできる様になりました。また以前は何も知らなかったベトナムの事も、ベトナム人と話すうちに興味を持ち、だんだん知識が増えてきました。どこの国の方でもそうですが、相手の国の事を授業で取り入れると、うれしそうに答えてくれて授業が盛り上がる事があります。食べ物や季節感、天気など日本との違いについてなるべく授業の中で話すようにしています。それによって学習者が日本と日本語にもっと興味をもってくれば、楽しい授業ができると思います。（西本 一徳）

KFCの活動の中で、日本語学習の「言葉」の説明に私（支援者）の日本語能力が試されていることを痛感します。学習者の生活感覚にあった、語学力に応じた説明が大切なことを私が学びました。またMOIでの支援は、「KFCへ何のために来ているの？」と子どもに言いながら、「KFCで何を学ばせたいの？」と毎回問われているような気がしています。

いろいろな事情で来日し、日本の学校で学ぶ子どもたちへの観点からの支援が乏しい——学習支援者の研修でも忘れられている——と思っているのは私だけ？（湊 信子）

「私とKFC」

北山先生のご紹介で、KFCで仕事をさせていただいて、もうすぐ半年になります。

初めて電話でKFCという名前を聞いた時、ケンタッキーフライドチキンと何か関連があるのではないかと思いました。

KFCでベトナム人の子どもたちの教育に関わることをきっかけに、家庭での教育の重要さや教育は家庭での問題だけではなく、社会の問題だと深く理解できました。どうすれば在日外国人の子どもたちは、日本人の子どものように、現在は同じレベルの教育を受け、将来は社会の一員として、自分の能力を活かし、日本社会の発展に貢献できるのか、家庭やKFCの大きな課題ではないかと思います。

ベトナム人として、KFCで子どもの教育に対して熱心に取り組んでいるKFCのスタッフボランティア、支援の方々の姿勢に接して、本当に感謝しています。本当にありがとうございました。

また、個人的な思いですが、日本とベトナムでの教育制度、教育仕方もかなり違うので、特に算数、数学の問題を子どもに説明しなければならぬとき、戸惑うことが多く、そこでスタッフの皆さんに教えてもらってから、子どもに伝えるので、自分にとって大変強になります。なんか

二回も中学の教育を受けるような気持ちでした（笑）。これからもよろしくお願いします。（レファンバオカン）

「私とKFC」

昨年の3月に30数年間勤めた兵庫県教育委員会（最後は県立学校の勤務でしたが）を持病の悪化で早期退職した私は、4月以降、第二の人生をどのように歩んでいけばいいのかと試行錯誤の日々を送っていました。

遅まきながら語学の勉強を始めたり資格試験に挑戦したりカルチャーセンターに通ったりもしましたが、自分のためだけにする活動は何か空しく、心が十分に満たされることはありませんでした。また、今住んでいる地域の中で自分が出来るささやかな役割を見つけてみたいとも思いましたが、現役時代は仕事をするだけで隣近所の人との付き合いさえほとんど無かった私には、それをどうやって可能に出来るのか解りませんでした。

そんな悶々とした日々を送っていた11月のある日、すがる思いで訪ねたのが長田区の社会福祉協議会でした。

そして、そこで紹介されたのがボランティア活動だったのです。目の前に広げられた幾枚ものボランティア募集のチラシの中で（正確な表現は覚えていないのですが）「外国にルーツを持つ子ども達に勉強を教え、簡単な事務作業もできるボランティア募集」のチラシに目が留まりました。「外国にルーツを持つ子ども達」、私にとってそれは耳慣れないけれどもとても心惹かれるフレーズでした。一体どこの国にルーツを持ったどんな子ども達がいるのだろう。今までまるで意識していなかった子ども達の存在への疑問と興味が、一気に心の中で大きくなっていきました。是非、直接子ども達に出会ってみたい。ここでボランティアをしてみたい。そう思いました。帰宅後すぐに「ボランティアをさせていただきたい」と電話を入れると、スタッフの方が快く受け入れてくださいました。こうして私のKFCでのボランティア活動が始まったのです。

それから1年間、ほぼ週2回のペースでKFCへ通い、子ども達への学習支援と「定住外国人子ども奨学金実行委員会事務局」の仕事に携わらせていただいています。

子ども達への学習支援では、相手のレベルに合わせて噛み砕いた形で勉強内容を教えることの難しさや解ってもらえた時の喜びを味わいましたし、同時に彼らの個性的で屈託の無い振る舞いや笑顔の裏側に日本社会の中で生きる厳しい現実がぴったりと張り付いていることも知らされました。

奨学金事務局の仕事では、日常的な事務作業のほかに、KFCとして初めての試みであった「KOBECANTERビレ・コンサート」や例年参加している「神戸まつり」「灘チャレンジ」等のイベントのお手伝いもさせていただきました。

これらの活動を通して私が感心させられたのは、KFCのスタッフの方やボランティアの方々がみんな明るくて思いやりがあり、礼儀もわきまえ、そして驚くほど真摯に物事に取り組まれることでした。イベントの前には、私は定時に帰りましたが、スタッフや他のボランティアの方々は時間も気にせず連日夜遅くまで準備に没頭されていたようでした。

1年前は退職による環境の変化に戸惑い、新しい生き方も見つけ出せずに途方にくれていた私でしたが、KFCでのボランティアを始めることによって、「居場所と出番」それに良き話し相手を得ることが出来、すっかり心は落ち着きを取り戻してきました。

週2回のKFCでの活動は、今、私にとって何よりかけがえのない時間となっているのです。（笹倉 達）

「私とKFC」

私はまだ大学生ということもあり、日々の生活のなかで同じ大学生とふれあう機会はあっても、異なる世代の方々とふれあう機会はあまりありません。しかし毎週水曜日は違います。KFCでボランティアとして活動させていただいている水曜日は、KFCに学習に来ている子どもたちや支援者の方々など、さまざまな世代の方とふれあう機会があります。そういった、大学での生活とはまた違うKFCでの時間は、私にとってとても貴重で、学ぶことの多い有意義な時間となっています。企業等で働いた経験もない私は、KFCのお役に立つことよりも、ご迷惑おかけすることのほうが多いかもしれませんが、これからもどうかよろしく願いいたします。（赤嶺 佑一）

暑い夏の日。午後4時前から、次々に子ども達が元気なあいさつと一緒に教室に入ってくる。日焼けして汗もうっすらおでこに浮べて。

「ヤバイねん、今日の宿題。」
宿題のプリントを見せてもらう。「ここここの面積を分けて、計算して足したら?」「あっ、そうか。」

どんなことでもわからないまま抱えているのは、大人でもつらい。押し寄せて来るような日本語の海で一生懸命学ぶ子どもたちの姿にいつも励まされている私があります。「ありがとう!」
（上野 加代子）

私が、初めてうけもったのは、ベトナムの3年生の男の子でした。言葉も通じず、辞書をおいて、絵を描いたりして勉強や日本語を教えていきました。休み時間にゲームやカルタをしたり、算数にサイコロ、トランプ等を使ったりしていくうちに、彼の方から「漢字の勝負をしよう」と言って、木ヘン、禾ヘン、さんずいヘン等競争して勝ったり負けたりしていくうちに、漢字が嫌いでなくなって、学校でも、良い点を取る様になり嬉しい気持ちでした。6年生の卒業の作文を見せてくれて、言葉がわからず淋しい思いをしたり、悔しい思いをしたり、家で辞書をひいていっぱい勉強していた事などを知り、こんなに努力していたのかと心が熱くなりました。これからも努力して、勉強して、自分の将来に向かって頑張ってくれる事を願うばかりです。KFCでは、どうしても時間が足らなかつたり、1対1で教える事が出来ず、子どもが集中しにくい等問題事も多くありますが、何とか、学校で困らない様、日本で生活してゆくのになじめるよう、力になればと思っています。子どもの出来た時の笑顔は素晴らしいです。これからもKFCの活動がもっと知られるようになり多くの人の参加があればいいなあと思います。（後藤 アユ子）

KFCニュース100号おめでとうございます。

私がKFCにお世話になり出してから4年程（実質は3年余）になります。これまでに感じた頃などを思うがままに書きます。

小生、物心がついてから25才位までは、長田区で生活していました。小学・中学・高校も新長田に近い所でした。

そういうことから下町新長田にあるKFCは非常に身近に感じられるところです。

平成18年春、サラリーマン生活を終えて、さて何をして時間を潰す? 余生をエンジョイすること? ことを考えざるを得ない状況に置かれました。そんな中、たまたま小・中・高とおなじだった友人（M氏、彼は大学卒業後カナダへ永住し、平成18年に日本に戻ってきたとか、その直前には、中国・大連で日本語を教えていた。）と会って“お前日本語を教えに大連へ行かへんか”との誘いを受けました。“いきなり、それは無理やで”“日本語を教えるにはノウハウもいるやろ”“ちょっと研修でも受けてから考えるわ”と臆病風に吹かれて、断っておきました。

そういった事があって、市教育委員会が生涯学習センターで実施した日本語学習支援者研修、KFCが実施した日本語ボランティア養成講座を受講し、日本語を教えるのはどういう事がぼんやりとはわかりかけました。

研修を一緒に受講したK氏から“日本語以外に小中学生に学習支援してみいひん”との誘いを受けました。

昔とった杵柄ではないが、学生アルバイトで学習塾もどきをした経験もあるし、何よりも人に教えるのが好きな教え魔の本性が出たのか？又教える事にプライドも感じながら、小さな事でもいい何か誰かのお役に立てればいいとそんな気持ちで始めてしまいました。

なかなか思ったように成果は上がりませんでした。学習者も自分がそうであったように勉強なんか無味乾燥だし、“恐いおっさんなんかと向き合ってもおもしろないわ”てな顔をして、外方を向く事もしばしばでした。

よく考えて見れば、学習者は通学しながら家事の手伝をし、KFCに通ってくる事が多いようです。更に来日してから日が浅い場合もあり、大変だなあと感心もします。

それでも自分が学習支援をしている時は、もうちょっとこっちを向いて欲しいなあとも思ったり、いわゆる反抗期に差しかかっている学習者もいて、事務局スタッフも懸命にバックアップしてくれるのですが・・・

自分の無能さを感じるそんな日々の繰り返しではあります。

中学も3年になればお受験でまた大変。

高校に合格してくれれば本人、スタッフ、支援者もほっとし、やりがいも感じます。高校に入った元学習者がKFCに来て話をしたりする時は楽しくなります。

今までのKFCでの活動で楽しかった事と言えば、他のボランティア、KFCスタッフの方々と反省会等での飲食、談話、研修旅行、各種講習会に参加出来た事です。有意義に、色んな経験をさせていただき感謝しております。

ところでKFCでは奨学金制度の創設等益々充実した活動をされ金理事長様をはじめスタッフ一同に感服いたしております。

もっともっと感謝されるKFCであってほしいと思います。

私もこれからも微力ながらKFCの活動を応援していくつもりですのでよろしく願いいたします。(T. S. 学習支援ボランティア)

KFCニュース100号おめでとうございます

毎回発行のKFCニュースには、神戸に定住している外国人の様子や支援をされる方の苦勞や喜び、また、支援を受ける方の意見等いつも盛りたくさんに記載されています。一つ一つの記事に目を通す時、いつも頷きながら見えています。

それにしても100号とはよく続いたものだ后感心します。編集にあられた方々、長い間ご苦勞さまでした。この100号を一区切りとして、更なる素晴らしい内容の継続をお願いします。

私が初めてKFCでK君に会ったのは2007年4月のことでした。

あれから3年も過ぎ、今では、子どもたちがまるで家族のようにさえ思えるようになりました。

「宿題は？」「自分でやり遂げる時間を決めなさい。」「困っていることはないの？」・・・等々。

先日来、S先生と学校周りを始めています。少しでもKFC活動が教育現場で理解され、協力者を増やしたいと思いながら・・・。

これからも「学習支援」に頑張りたいと思います。

KFC100号記念号発行おめでとうございます。（学習支援担当 東野修明）

■■■KFC日本語プロジェクト■■■

◆研修会「漢字指導の方法～甲骨文字を使って」

12月11日冬の冷たい小雨の降る中、定時より数分遅れで「漢字指導の方法～甲骨文字を使って」という研修会は始まりました。講師は関登美子さんで、宝塚市で外国人児童のサポーター派遣の創設に携わり、現在は家事調停委員をされています。（他にも多方面でご活躍です。詳しくは著書「ちゅうごくの十二支のものがたり」で）

甲骨文字は漢字の祖形で約3000年前の中国の初代王朝と言われる殷（商）の遺跡から出てきた文字で、文字というのは見えないもの（心）をあらわすものであり、文章でその心が伝えられる。（甲骨文字を使って説明あり）種子が土から芽を出す前に土の中はどうなっているか。毛根が生え、芽の大きさ以上の根をはっている。人も同じである。生まれたての赤ちゃんがまず感じることは「自分が愛されているかどうか」である。母親に愛情が注がれることで安心し次の能力を伸ばしていく土壌ができるのである。であるから、自己の確立（IDENTITY）は思春期に突然形成されるものではなく生まれた時からの積み重ねでできあがるものであり、自己の確立は、精神力—情動の教育、知力—理知の教育、体力—身体の教育の三点からなされるが、何よりも情動の教育から始める必要があると考える。そこからも日本語指導に関わる心は、共存・共栄ではなく、共尊・共敬で始めるべきである。指導の技術以上に心が相手に届くのである。

甲骨文字は人間の感性が生み出した絵文字であるので、子どもの心へストレートに届いていく。何の形であるか当てるのはゲームである。そこで現在の漢字を示してみても、ゲームの続きの学習である。子ども心に、してやられたという顔つきだが、そのまま漢字の学習へ結び付ける。また子どもの日本語学習には学力がつく方法で考えていく必要もある。たとえば「明日晴れならば、遠足に行く。」という文で（仮定）の「ならば」を勉強するなら、同時に「二本の線が平行ならば、 $\angle A$ と $\angle B$ は同角である。（図略）」を説明していく。

教育についてはIDENTITYの点からも、外国人の子弟に対し本来、公的に責任をもつべきであると熱い思いを伝えていただきました。後日、研修会で紹介したかったという補足のメールをいただきました。書面の許す範囲でここで取り上げさせていただきたいと思います。

（メールより）今では「いのちの電話」の知名度は相当に高まっています。しかしこの発起人は日本社会を援けようとして来日したドイツ人だったことをどれほどの日本人が知っているでしょうか。27歳で来日したヘットキャンプさんはプロ意識をもって49年間「いのちの電話」の重要性を日本社会に位置づける努力をされました。

精神医学の重要性に無頓着な日本社会はボランティアがやればよいという意識から脱しません。ヘットキャンプさんは口実を作って76歳で帰国しました。

朝日新聞記者の取材に対してヘットキャンプさんは「日本社会に根付かせるため、外国人は身を引かなければ、とずっと考えていました」という言葉で答えています。

この日本社会のネックを新聞購読者はどれほど読み取ったのでしょうか。

私（関）は、絶対に組織を作らない。

精神医学に裏づけされた行動を日本社会の組織にやるべきことだと説得し続けて来ました。

日本社会を改善できるのは日本人です。日本人がどれほど自分たちの社会を愛しているかです。

日本語指導をきちんとしなければ日本社会に何が生じるか。

医療技術だけを重視して命を救って発達を置き去りにしたら何が生じるか。帰化した私ではなく、生粋の日本人が取り組まなければならない課題です。

2009年12月11日にこの新聞記事を読んだ正月、ラジオで「いのちの電話」のボランティアを募集している声が流れました。プロの精神科医ではなく、インスタントの養成講座で対応しているのです。

日本はいまだこういう社会ですから、49年間日本の為に働いた後、帰国されたヘットキャンプさんが賢いと思います。

(湊信子さんのまとめノートより奥が追記しました)

◆KFCニューズ100号記念寄稿

日本語学習者のみなさんからKFCへの思いを書いて頂きました。

①KFCは結構楽しいけどもっと漢字を習いたいです。それと学生と先生と会話をしたいです。②今まではKFCを考えるといい思い出があります。いつもKFCに行くと楽しんで行っています。いつも新しい言葉を習うし、ていねいな話しかたも習うし、先生が話すと分かりやすいです。③KFCがあってよかったです。新しい人と会えるしいっぱい日本語を習える。(ジュリアン)

①KFCでもっとべんきょうしたいです。かん字もよめるようにかけるようになりたいです。②日本語のおしえかたが分かりやすかったと思います。先生たちもやさしかったです。KFCでつかった本『みんなの日本語』分かりやすくていい本と思います。ひとつのきょうしつにいろんな外国人があつまってたのがすばらしかったです。③KFCで日本語だけではなくて日本のぶんかもおぼえました。(ケイパーズカーラ孝子)

今まで勉強した事に関しては特に言う事ありませんが、仕事の紹介をしてもらえば嬉しいです。仕事をするための勉強も出きたらいいと思います。例えばパソコンや1級の勉強などです。そのための教材を増やしてほしいです。

KFCの先生のアドバイスのお陰で2級能力試験合格できて嬉しかったです。KFCに来て、先生といろいろな相談できて自分のニーズに合った勉強できました。又外国人のお友達も増えて、情報交換できるようになった事がよかったです。(小西タイシア)

私は、今KFCで日本語を勉強しています。私は日本へ来る前に、中国の北京で、少し日本語を勉強しました。先生は中国人でしたから、日本語の説明は全部中国語でした。でもKFCの先生は、すべて日本語で教えてくださいますから、とても勉強になります。また、教室がJRの駅の近くにあって、たいへん便利です。これからもよろしくお願いします。(周永紅)

私とKFC

私は張由怡です。今年の7月に日本へ来ました。今こうべ小学校の6年生です。私の友だちがKFCのことを教えてくれました。私もKFCで勉強したいと思いました。初めの日にはKFCへ行ってちょっと緊張しましたが、先生がとてもやさしくて教えてくれました。私はKFCが好きになりました。いま毎週火曜日にKFCで日本語を勉強しています。友だちもできました。今毎週KFCに行くのはとても楽しいです。(張由怡)

わたしは2005年7月に日本へきて10月にKFCでべんきょうをはじめました。KFCの人たちはやさしくってきんちょうしませんでした。ここではべんきょうだけでなく、がいこくじんが日本のせいかつをスムーズにできるようにおしえてくれました。日本の文化やルール、日本人のかんがえかたのはなしもききました。ときどきみんなであつまっているいろんなたのしいことをしました。

りょうりきょうしつ、クリスマスかい、おせちりょうり、はなみなどです。先生はなにをべんきょうしたいかきいてからいっしょにきめました。KFCがたくさん外国人がきて、人気があるきょうしつになるようにわたしはきたいします。（春井リュボーヴ）

■■■ K F C 外国にルーツを持つ子どもの学習支援 ■■■

◆「在日外国人児童の読書の会」～児童、K F Cスタッフとともに～

N P O 法人神戸定住外国人支援センター（K F C）と神戸市立新長田図書館との共催事業「在日外国人児童の読書の会」（以下「読書の会」）が平成22年6月からスタートしました。

この「読書の会」が実施されることになったきっかけは、K F Cの金理事長と前任の平木館長との「日本に住んでいる外国人児童のために、何かできることはないだろうか。」というお話からでした。長田区にはアジア系の在日外国人が多く、特に近年ではベトナム人が神戸市の中でも長田区に最も多く暮らしています。しかし、日本語を理解することが困難で、社会生活や学校生活をおくる上で問題を抱えている人たちもたくさんいるというのが現状です。そのため、神戸の定住外国人を支援する活動をしているK F Cと平成7年12月の開館からアジアの図書の充実を図ってきた新長田図書館が協力して、在日外国人児童の読書推進や学習支援を目的に、新しい事業を企画することになりました。

4月から何度か話し合いを重ね、提案内容も何度か修正し、5月上旬にこの事業を実施することが決まりました。6月からのスタートのため、K F Cの志岐さんと短期間で長田区の近隣の小学校にもチラシを配布しました。広報不足もあり、申込があるだろうかと心配していましたが、K F Cに来ている子どもたちにも声をかけていただき、6月の第1回目にはペルー人とベトナム人の5年生の男子2名の登録がありました。7月には神戸市人権教育課の指導主事の方々も同行して、近隣の7小学校にチラシを配布しました。その後、9月にはベトナム人の4年・5年生の男子2名も登録し、現在は4名になっています。

「読書の会」は毎週金曜日の16時から18時まで、図書館スタッフによる日本語絵本や紙芝居の読み聞かせ、K F Cスタッフによる他言語での読み聞かせ、参加児童による日本語や母国語の読み聞かせを中心に、児童書の読み物からのなぞなぞ・クイズ・言葉遊びをしながら楽しく日本語の学習もしています。9月には特別企画行事「おりがみ教室」も開催し、登録児童の友達も参加しました。

毎回、K F Cのフフデルゲルさんと相談をしながら、「読書の会」のプログラムも回を重ねるごとに工夫しています。これからも子どもたちに本を読んで楽しい時間を過ごして欲しいと願っています。

今後の課題は、参加児童がなかなか増えないことです。長田の放送局「F M わいわい」にも「読書の会」を紹介し、朝日新聞と神戸新聞にも「読書の会」の記事が掲載されましたが、在日外国人児童の保護者には、このような広報が届いているのだろうか、どうすればより多くの在日の方々に「読書の会」を知ってもらえるだろうかと考えています。

これからもK F Cスタッフの方々とは相談しながら、子どもたちにとって「読書の会」が毎週、楽しみの時間・場所となるように、そして子どもたちの輪が広がっていくように努めていきたいと思っています。

◆「ベトナムの教育ってどんなもの？」

12月17日、KFC連続教育セミナーが行われました。第一回目の今回は、関西学院大学修士課程に在学中で、KFCスタッフとしても活動されているレ ファン バオ カンさんに「ベトナムの教育事情と日本におけるベトナムにルーツを持つ子どもの状況」について講演いただきました。

「ベトナムのお母さんやお父さんは、みんなとっても教育熱心なんですよ。」留学生としてのご自身の視点から、身近にベトナムを語ってくださるカンさん。前半は、「ベトナムの教育の状況」と題された配布資料に沿いながら、ベトナムの教育が抱える課題や、学校の様子などを詳しく解説していただきました。現代のベトナムの教育の主な課題としては、①教育カリキュラムが重すぎる(入れ込み教育) ②教育の都鄙格差 ③不就学の子どもの存在 ④教科書の知識が古いことなどが挙げられました。成績や、テストの点数ばかりを追いかけられているので、学力が表面的で応用力に欠けているのではないかと、という指摘もありました。

また、ベトナムの学校の様子については、ある小学生の一日というストーリー形式で、朝ご飯を学校で食べること、学校が昼の部と夕方の部に分かれていること、保護者がバイクで迎えに来る下校風景、など日本の学校との違いが分かりやすく紹介されました。

後半は、在日ベトナム人の子どもの母語教室に関わられた経験や、日本で学んでいるベトナムにルーツを持つ子どもたちについてお話いただきました。日本生まれの子どもが増える中で、「どうしてベトナム語を勉強しなくてはいけないのですか？」と問う子どもも少なくないそうです。そういった子どもたちには、ベトナム語での交流という広い捉え方で、ベトナム語に出会い、何らかの形で楽しくベトナム語を勉強して欲しい、といった想いで指導されているとのことでした。「国籍が変わったとしても、ベトナムにルーツを持っていることは何も変わらない。自分を大切にするという意味で、ベトナムへの愛着を持ってほしい。自分への愛着を持っていなければ、他の国への愛着も形成されないと思います。」と想いを語られた。いまの母語教室の状況を紹介すると同時に、非常に示唆に富んだ内容で、その後の議論も深まりました。

質疑応答のコーナーでは、実際の学習支援の場面で、学習に対する動機づけをどうするか、というより実践的な議題が飛び出し、参加者全員が知恵を絞って考え込む場面もありました。その他には、ベトナムの塾事情や、教師の地位など、教育全般についての議論が交わされ、ベトナムの国全体の教育に対する熱心な姿勢がうかがえました。

これから3回に分けて、フィリピン・ブラジル・アメリカのそれぞれの教育事情について講座をご用意しています。たくさんの方の参加をお待ちしています！ (藪田 直子)

■■■ ハナの会 ■■■

◆X'mas会&忘年会

昨年12月14日(火)、15日(水)の二日間、ハナの会では今年もX'mas会&忘年会を行いました。

今年もオモ二達は『ハンドベル』に挑戦！今回は『トラジ』を演奏しました。2週間前から少しずつ練習をして本番を迎えました。二年目とあって、ハンドベルの振り方はお見事でした。

(指揮者のスタッフは汗だくでしたが…)練習の時も、きちんとご自分のパートを覚えて、指揮者の手をよく見て演奏されました。皆さん笑顔で楽しんでいらっしまったので、スタッフも大変うれしかったです。お疲れ様でした。(スタッフはいつものX'masソングに加えて、ハンドベル

で『大きな古時計』を演奏しました。)

また今回のスタッフの演目は、少し志向を変えて5名が3組に分かれて準備しました。ひと組目は、韓国の古くからある有名な恋物語の『春香伝』(チュニャンジョン)の一場面を、相談員の呉景淑と男性スタッフの呉洪錫が演じました。何年か振りかに再会したという場面を、歌とセリフを少々アレンジしたミュージカル(?)に仕上がりました。女装をした男性スタッフの登場から大爆笑!中には笑っぱなしのオモ二も。韓国語のセリフと歌に、すっかり魅了されたひと時でした。

ふた組目は、吉田信子と林亜也佳の二人が志村けんの『変なおじさん』の扮装(腹巻にパッチ姿)で、ドリフターズの往年のギャグを連発!比較的若いオモ二達は、笑いのつぼにはまって大爆笑でした。加藤茶の「ちょっとだけよ!」では、手を叩いて喜ぶオモ二も何人かおられて、思い切り笑ってもらえたと、スタッフも大満足でした。三組目は、本格的な演奏をオモ二達に聞かせてあげたいと、朴京守(パク・キョンス)(民族伝統楽器の演奏活動をする在日2世)と朱良枝によるソルチャングとサムルノリのヨンナムカラクを披露しました。普段歌の伴奏で叩くチャングとは少し違う演奏とケンガリの音色とリズムに体を揺らし、手を叩いて喜んで下さいました。また、15日には在日3世で韓国舞踊家の安晴淑(アン・ジョンスク)さんを迎えて、太平舞(テピョンム)と、扇の舞(プチェチュム)を踊って頂きました。

その他に恒例の理事長と長沼さんのカラオケもあり、最後はサンタクロースの登場!軽快な音楽に乗って、今年も楽しいダンスを見せてくれました!心ばかりの暖かいプレゼント(長いポソン(靴下))をおひとりおひとりに手渡すと、オモ二達は皆、満面の笑顔になりました。

今年もにぎやかなX'mas会ができましたことを、ご協力下さった理事

小学4年生の愛子ちゃんの作品

小学4年生のトリストン君の作品

長始め、ボランティアの皆さまに、紙面をお借りして心より感謝申し上げます。カムサハムニダ。

最後になりましたが、ハナの会を利用して下さるオモ二、アボジ、ご家族の皆さま、その他ハナの会を愛して下さる全ての皆さまに新年のごあいさつを申し上げます。今年も変わらず、ハナの会をよろしく願い申し上げます。セボックマーニパドウセヨ(新年の福をたくさんもらって下さい!)(ハナの会 スタッフ一同)

◆KFCニューズ100号記念寄稿

ハナの会をご利用頂いているハルモ二(おばあさん)たちからハナの会への思いを書いて頂きました。

長いこと仲良くしてほしい。

私が死ぬまでずっといてほしい。

ごちゃごちゃするのはきらいやから。(曹 崇 月)

いいじゃないか。

ひとりでも増やしたい気持ち。

人が良い。歌を教えてくれる。楽しく遊べる。

ここ以上のところはない。言うことない。(李 季 順)

もっと人が増えて仲良くしたい。
来ることがうれしい。
風呂に入れる。ご飯がおいしい。
入院してる時、飛んで来たかった。(金 年 子)

■■■ 今後の予定 ■■■

■ 研修会

2月12日(土) 13:30~15:00

「2011年度の研修計画を作ろう」(予定)

於 多文化子ども共育センター (moi)

■ 第2回KOBEカンタービレ・コンサート

2月20日(日) 13:30~17:00

於 神戸市立地域人材支援センター講堂 (旧二葉小学校)

■ フィリピン、ベトナム、アメリカ、ブラジルの教育事情

2月25日(金) 18:30~20:00

「ブラジルの教育事情と日本とブラジルを行き来するブラジルにルーツを持つ子どもの状況」

講師：山本晃輔 (大阪大学大学院博士課程)

於 多文化子ども共育センター (moi)